

第 1 回北山エリア全体調和意見聴取会議 資料 編

◆北山文化環境ゾーン整備推進についての検討（平成21年4月～10月）

【議論の内容】

- ・ 将来像の基本的方向性『街区構想』を描くために検討
- ・ 「空間を創る視点」、「機能を整える視点」でコンセプト検討
- ・ 文化と環境に包まれたやすらぎと交流の中で京都を世界に発信する街・開放感あふれ、歩いてまわりたくなる街

◆北山文化環境ゾーン未来構想委員会（平成28年1月29日、6月2日）

【議論の内容】

- ・ 北山エリアを核としつつ国際会館や大学群を含む広域的視点で再整理し、「現代性」と「国際性」が主張できる希な地域
- ・ 北山文化環境ゾーンの整備の視点
- ・ ゾーン内の統一性、ゾーンへの集客の仕組
- ・ 資料館跡地活用のイメージの策定
- ・ 創造の拠点＋公演・展示施設＋マーケットの三位一体構想、相乗効果を上げる取組、人が集う観光客の周遊、マグネット力
- ・ 持続可能なエリマネ・プロデュース仕組み 等

◆総合資料館跡地活用等検討委員会（平成28年8月29日、平成30年7月12日、7月26日）

ゾーン全体の方向性の議論が一定の進捗、京都学・歴彩館の建物が完成、移転目途も立つ：総合資料館跡地の具体的な活用案等を検討

【議論の内容】

- ・ 跡地活用についての用途・整備手法に関すること
- ・ 総合資料館跡地に整備する具体的な施設イメージ
- ・ エリア全体から見た広場・プロムナードのデザイン

【施設整備の方向性】

北山ゾーンでは、舞台・視覚芸術施設を軸に国際会館や大学と連携し、芸術鑑賞・自然体験・交流を楽しめる滞在型の魅力づくりが必要。イベントや宿泊・飲食など多様な機能を組み合わせ、土地を一体活用してゾーン全体の価値向上を図る。

◆京都府総合計画「北山「文化と憩い」の交流構想」（令和元年10月）

- ・ 京都が世界に誇る文化と憩いに包まれた交流エリアの形成

旧総合資料館跡地を活用した「シアター・コンプレックス」や、開園100周年を迎える府立植物園など、芸術の発信や賑わい・交流機能を有する施設の整備に取り組むとともに、国際MICEを促進し、文化庁移転を契機として、国内外から人が集い、交流し、京都から新しい文化創造を進める

令和2年12月

◆北山エリア整備基本計画（資料館跡地のみではなくエリア全体の整備方針の叩き台） 基本理念（コンセプト）「憩いの緑と躍動するまちが融合した「文化創造の森」の創出」

◆府立植物園、府大体育館、旧総合資料館跡地活用における意見聴取者会議の開催（令和4年5月～令和6年7月）

令和7年12月 トップミーティング

◆北山エリアまちづくりについて、幅広く意見を聞く会議を設置することで知事、市長が合意

◆北山エリア全体調和意見聴取会議 開催（令和8年8月～1年間）

旧総合資料館跡地等の活用に係る意見聴取会議等における主な意見

- ・ 芸術拠点整備を通じて地域活性化と文化行政の発展に寄与する取り組みが重要である
- ・ チケット購入者が周辺施設を割引利用できる連携サービスで地域との結び付きを強化する
- ・ 若者が京都に残り、活躍できる文化拠点への期待したい
- ・ 商店街や周辺施設と協働し、エリア全体で一体的に運営する仕組みづくりが必要ではないか
- ・ 建設・維持コストの上昇を見据えた運営計画が重要ではないか
- ・ 舞台芸術と視覚芸術の分野を統合的に扱う施設整備の方向性を検討したほうがいい
- ・ 旧総合資料館跡地を起点に、植物園や大学、コンサートホールなどを結ぶ「関係人口」の創出が重要である
- ・ ハード整備と並行して運営方針やネットワーク構築を進める必要がある
- ・ 暫定活用期間中も実験的な事業を実施し、拠点形成を進めるべき
- ・ 植物園や大学、京都学・歴彩館などとのエリア一体運営するマネジメントが必要ではないか
- ・ 府民による主体的に参画したくなる仕組みづくりが必要ではないか
- ・ 文化芸術とビジネスを融合させ、若手クリエイター育成にもつながる計画づくりが必要である
- ・ 利用者が長時間滞在し芸術に触れ続けられる時間・空間設計ができる民間施設が必要である
- ・ 可変性、汎用性がある施設にしてはどうか



4－1 舞台芸術・視覚芸術拠点施設が果たすべき機能・役割

これまでに頂戴した様々な御意見を踏まえ、舞台芸術・視覚芸術拠点施設が北山エリアの中で果たすべき機能・役割を以下のとおり整理。

北山エリアのエントランスにふさわしい文化・芸術の魅力あふれる顔づくり

- ・ 北山エリア北東部において多様な人々が集うエントランスとしての顔づくりを目指す。また、地下鉄駅とつながる駅まち一体型の空間形成を図る。
- ・ 北山通沿道への文化・芸術による魅力のしみ出しを図るとともに、北山通から南にのびるプロムナードにより、通りを行き交う人々を北山エリアに誘い込み、エリア全体での回遊性の向上を目指す。

「自然環境と文化芸術が共存する北山エリア」を発信するまちなみの形成

- ・ 隣接する賀茂川や植物園の自然環境との調和に配慮するとともに、周辺住宅地のまちなみにも配慮した景観形成を目指す。
- ・ 京都の中でも稀有な郊外性を活かし、緑に囲まれた中に文化・芸術・学術施設が集積する環境づくりを目指すとともに、地球環境に配慮した都市空間として、国内外からの来街者に北山エリアの魅力を発信する。

交流・憩いの場の創出、良好な環境の維持による地域の価値向上

- ・ エリア内に、交流や憩いの場となるパブリックスペースを設け、緑陰による心地よい空間を提供し、地域住民・府民のウェルビーイングに貢献する。
- ・ 地域住民や周辺施設の管理者など北山エリアに関わる様々な人々のつながりを大切にしながらエリアマネジメントを推進していくことで、良好な環境の維持や地域の価値向上を図る。

4-2 具体的な機能の整理

施設・設備	必要となる具体的な機能
ホール	・全ての客席が視覚的にも聴覚的にも良好な鑑賞条件となる配置にするため、客席の幅は舞台の開口幅よりも広くなりすぎないように配慮が必要。 ・最大視距離は舞台上の細やかな表現も見極めることができる距離となるように工夫。 ・快適に過ごせるよう客席間隔は前後・幅ともにできる限りゆとりのある計画にすることが必要。
スタジオ	・多様な利用者が使い易いよう、小シアター・中シアター双方の複数設置が必要となるが、必ずしもホール部分との合築は必要なく、芝居小屋のイメージや可変なものも含めて検討。 ・ホール利用者の練習用にも活用できるよう、ホールの舞台寸法に準じる広さを有する大シアターが必要。大シアターは、ダンス等に対応するため、床はホール舞台と同等の弾力を持つ構造を想定し、バレエバーや全面鏡の設置も検討。 ・「ブラックボックス」と呼ばれる、舞台と客席が一体となった全体的に暗い色調の四角い空間を設けると、舞台関係者にとって利便性が向上。 ・衣裳・小道具などの製作作業やメディアアートの作品づくり等のための複数の作業室が必要。
ギャラリー	・展示室は100㎡程度であればアマチュア団体の利用も利用しやすく、可動間壁などにより分割使用も想定。 ・大型の絵画や書道の展示等に対応するためには4m以上の天井高さが必要。 ・展示系アートと舞台芸術系アートを融合する空間として「ホワイトキューブ」(※)の設置も検討。 (50㎡程度の広さが好まれ、天井高さは7m確保できると利便性が向上。)

※ホワイトキューブ：装飾を排した白い立方体型の展示空間。美術作品の展示に加え、メディアアートの発表やダンス・演劇などの身体表現等も含めた幅広い作品の発表の場として活用可能。

(イメージ例)



ブラックボックス型の小劇場：THEATRE E9 KYOTO
(コトブキシーティングHPより引用)



ホワイトキューブ型の展示空間：101WHITE SPACE
(101WHITE SPACE HPより引用)

施設・設備	必要となる具体的な機能
エントランス	・建物の主入口内の空間は、それぞれの目的施設にアプローチするためのスペースであり、ホールの開場を待つ人々の待機スペースとなることから、できるだけ大きな空間の確保が必要。 ・各部門への動線がわかりやすいことや会場待ちの人々が動線の妨げにならないよう配慮が必要。 ・エントランスロビーが隣接施設との結節点となることを考慮したゾーニング計画が必要。
プロムナード	・エリア全体を南北に結ぶ歩行者空間として、府立大学・歴彩館から北山通につながるプロムナードを設置。 ・本施設にはプロムナードに面して開かれ、交流・発信拠点となる機能が重要。 ・舞台芸術・視覚芸術拠点施設、京都コンサートホール、陶板名画の庭に囲まれた広場を計画するなど、来訪者、府民の交流イベント開催時の空間を設け、各施設間の連携を促進する機能が必要。 ・プロムナードに面する諸室にはできる限りガラス張りの開口部を設け、内部の活動が見通せるようにすることも検討。 ・北山エリアの豊かな自然環境を活かしたオープンスペースとして、パブリックアートの展示や植物園などエリアを訪れた人々を施設内に誘導する機能が必要。

(イメージ例)



大空間を確保したエントランス：アクリエひめじ
(姫路フォトバンクHPより引用)



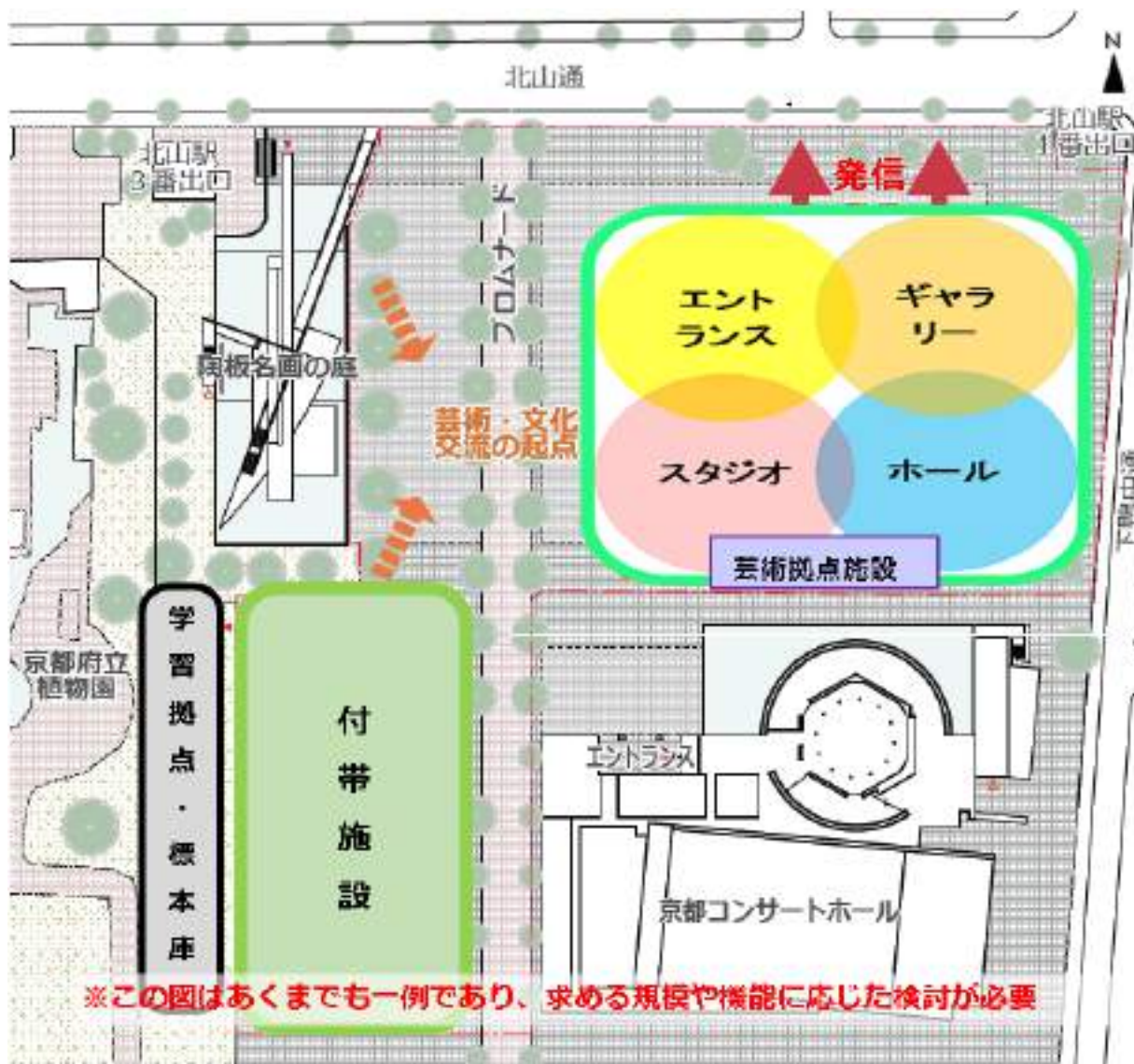
並木みち「プロムナード」



様々な文化活動が内外で展開する広場

施設・設備	必要となる具体的な機能		
付帯施設	・舞台芸術・視覚芸術拠点施設だけでなく、エリア内各施設の付帯施設として位置付け。 ・幅広い施設形態が考えられ、施設イメージと期待される連携効果を以下のとおり例示。		
	(求められる機能)	(施設イメージ)	(期待される施設連携効果)
	【交流】 北山エリアを訪れた人々や各施設の利用者が滞在して交流できる機能	・ショップ ・カフェ ・迎賓 ・バンケット施設 ・みどりと文化の交流施設 ・市民・大学交流センター	・植物に触れる機会創出 ・おもてなし施設/くつろぎ空間/回遊動線の創出 ・ウェルビーイング向上
	【創造】 大学や文教施設が多く立地している利点を活かした新たな価値を創造する機能	・産学連携イノベーション施設 ・ラボ/ワークショップ施設 / 滞在型創作/研究施設	・緑を守り育てる活用/研究保全への活用 ・コラボ/共同研究/人材育成への寄与
	【発信】 文化芸術・学術等の北山エリアの魅力を発信する機能	・情報センター/ライブラリー等 ・植物園の学習連携 ・情報発信施設	・キャンパスエントランスとしての発信 ・植物園の幅広い情報発信

4-3 舞台芸術・視覚芸術拠点施設が果たすべき機能・役割



- ・北山通から視認性が良く、気軽な市民参加を促し、文化芸術の魅力発信に繋げる。
- ・「自然環境と文化芸術の共存」の実現には、エリア内の自然環境を活かした景観形成が重要である。
- ・付帯施設が有する「交流・創造・発信」機能の具体化には民間事業者との対話が求められる。
- ・芸術拠点施設と付帯施設の配置については、求める規模・機能により変化すると考えられる。
- ・陶板名画の庭や京都コンサートホールも含めた施設間連携のあり方の議論も必要である。

植物園整備検討に係る有識者懇話会等における主な意見

- ・ 100年前の開園理念を受け継ぎ、次の100年へ向けた植物園の方向性を考えるべきではないか
- ・ 子どもや若い世代が訪れたい魅力ある植物園づくりと情報発信が必要である
- ・ 子どもたちが継続的に植物と関わる学習プログラムの充実させてはどうか
- ・ ハード整備だけではなく、ソフトプログラム（民間の知恵を入れつつ）にも力を入れるべきではないか
- ・ 京都らしさ、日本らしさを感じられる空間づくりが大きな魅力になるのではないか
- ・ 特定分野への専門特化だけでなく、多面的な魅力を備え、多様な利用者ニーズに応えられる植物園を目指すべき
- ・ 植物多様性保全への貢献だけでなく、そのための発信機能を強化すべき
- ・ 植園者サービス向上のための飲食施設や雨天対応施設などの施設も充実させるべき
- ・ 公園的機能と植物の博物館的機能を両方に伸ばしていくことは重要である
- ・ 花を咲かせ種をつなぐ「繁殖」を中心とした植物園本来の研究に立ち返る必要ではないか
- ・ 園内に多く存在する巨木は、植物園ならではの重要な魅力資源である
- ・ 今後3年、10年、100年という時間軸で取り組みをどうつなぐかが重要である
- ・ 「栽培」と「研究」の両立のほか、京都から世界の生物多様性に貢献するべきではないか



次の100年に向けた京都府立植物園像

将来ビジョン

- 植物が生態系にもたらす役割をわかりやすく伝え、未来への種をまく植物園として、京都から世界の生物多様性保全に貢献する



コンセプト (基本方針)

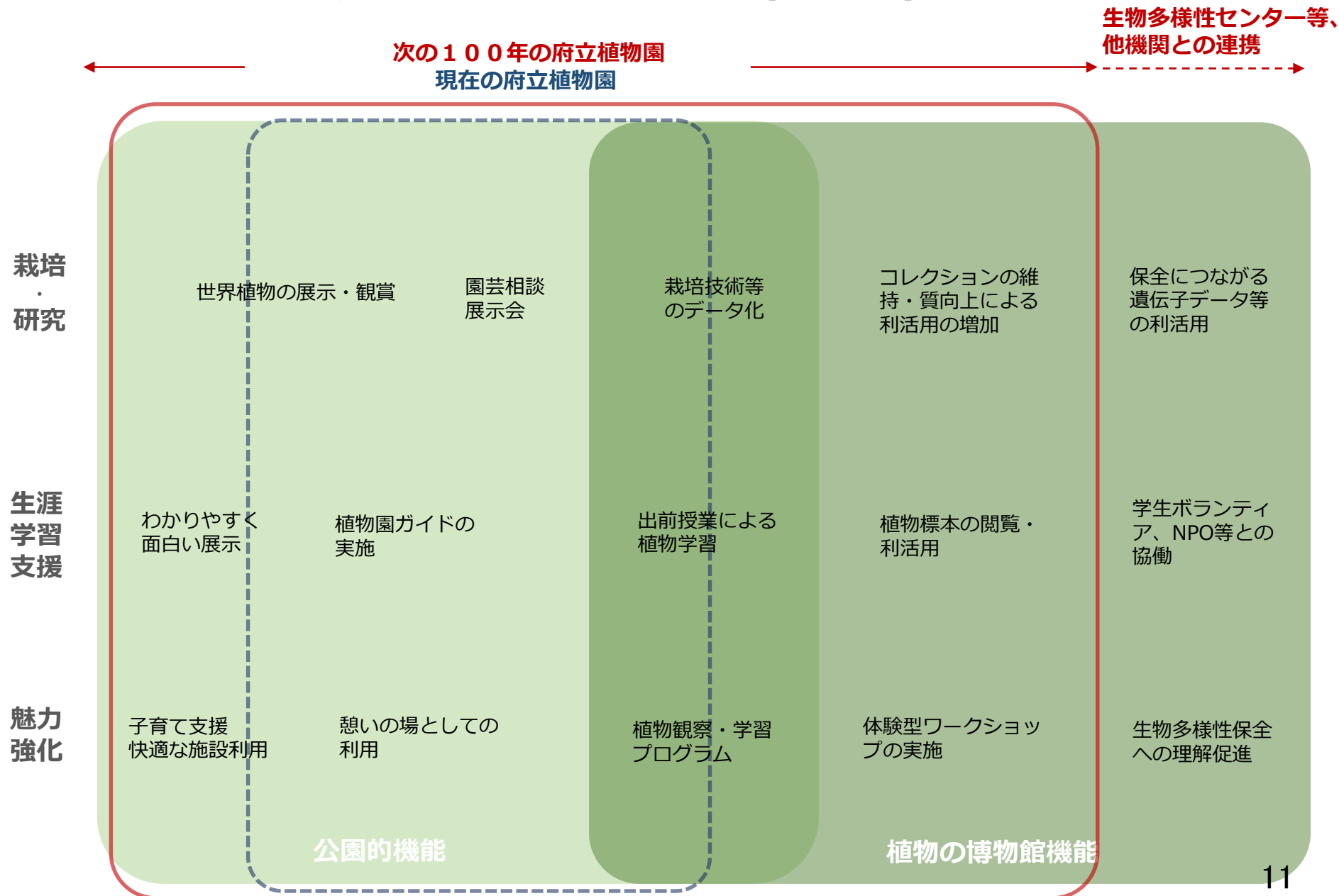
- 誰もが楽しく学べる「学びの入口」として学習機能を強化
- 京都府内の植生把握等を通じた植物多様性保全への寄与



取り組むべき 内容

- これまでの府民の憩いの場の機能に加えて、博物館機能を拡大
- 次代を担う子供たちや若い世代向けの魅力を拡大
- 植物多様性保全に関する研究機能を拡大

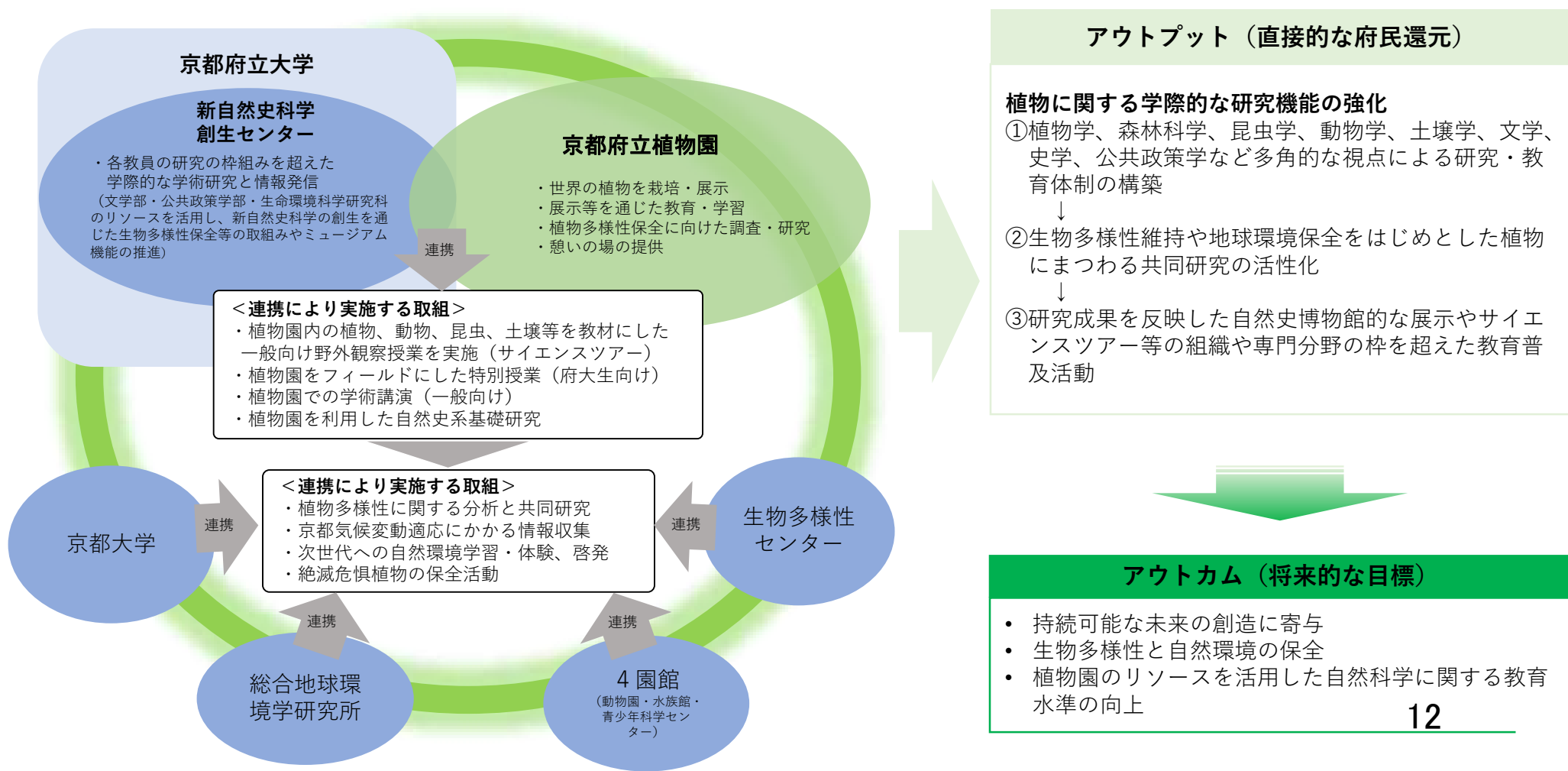
次の100年に向けた京都府立植物園像（概念図）



京都府立植物園における学際的研究拠点機能のイメージ

目的

- 植物園と大学、研究機関等との連携により、植物に関する学際的な研究拠点として研究・教育機能を強化
- 植物園のハード・ソフト両面での取組により、将来の京都を担う子どもたちをはじめ幅広い世代が植物に触れながら自然環境や植物と人との関わりを学べる場を提供



植物園整備に向けた施策の具体的な方向性

想定される配置図 1 (温室を北側に配置)

- 種の系統保存に資するバックヤード温室の新設
- バックヤード温室の新設
- 観覧温室は新築建替
周辺景観が見渡せるような機能を追加



想定される配置図 2 (温室を南側に配置)



共同体育館整備に係る意見聴取会議等における主な意見

- ・ 学生も地域住民も使いやすい、借りやすい環境づくり、地域に開かれた体育館が必要である
- ・ 学生・地域双方に喜ばれる施設整備が必要ではないか
- ・ 災害時の施設利用（周辺の防災拠点化）可能な施設が必要である
- ・ 若い世代の教育の場としての整備として位置づけていく必要がある
- ・ 大学キャンパス内の位置づけだが、地域に貢献する開かれた府立大学であるべきである
- ・ スポーツ施設自体より付帯施設や更衣室、お手洗い、シャワールーム等をユニバーサルデザインにしてはどうか
- ・ 社会環境の変化や情報技術の進化に応じて機能追加や改修が可能な「変化できる施設」が望ましい
- ・ 体育館単体ではなく、大学キャンパス全体を考えていく必要がある
- ・ 学生だけでなく教員も施設づくりに主体的に関わる仕組みが必要ではないか
- ・ 府大体育館では競技団体が望むものを整備することは難しい
- ・ 計画施設は単なる「体育館」ではなく、スポーツ・文化活動を含む「学生活動エリア」と捉えるべき
- ・ 大学内だが、早稲田アリーナのように命名してはどうか
- ・ 北山では2,000人規模のアリーナを整備することが最適である

【府立大学意見聴取の結果】

- ・ 学生ワークショップで検討された平面図を基本とした共同体育館を可及的速やかに設置いただきたい。
- ・ 大学の教育施設として整備・運営することが大前提であり、従来の利用時間や日数を確保した上で、多目的な活用の方向性や施設の規模等について整理し、整備を進めていただきたい。
- ・ 近隣住民をはじめ、府民に還元するため、地震や水害等の災害時に地域の安全拠点となるような施設の設置や災害備蓄庫の設置等について検討いただきたい。
- ・ 「地域に開かれた大学」として、地域イベント等、府民に利用いただけるような運用を図ってまいりたい。

【学生ワークショップでの意見に基づく配置イメージ】

